

氏 名	多田 光宏
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第 4 4 1 号
学位授与年月日	平成 2 7 年 3 月 2 0 日
審 査 委 員	主査 教授 織田 禎二
	副査 教授 紫藤 治
	副査 教授 木下 芳一

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

気管支喘息・喘息死は公衆衛生上の重要な問題であるが、日本における喘息死亡率は他の先進国に比べて高く、患者の大半は 65 歳以上の高齢者が占めている。気管支喘息が頻度の高い疾患であることを考えると、一般医による喘息診療への関与が必要であるが、一般医における喘息診療は専門医に比べ劣る、という海外での報告がある。そこで、本研究では高齢者における専門医と一般医における喘息マネジメントを比較することを目的に、質問票によって患者背景、治療内容、喘息のコントロール状態、治療へのアドヒアランスに関する調査を行った。調査に参加した患者を 65 歳以上と以下に分け、さらに喘息診療に従事する医師を呼吸器専門医と一般医に分類し、計 4 群に分類し比較検討した。喘息のコントロール状態の評価はこの分野で標準的テストである喘息コントロールテスト（Asthma Control Test: ACT）を使用した。

779 人が解析対象となり、このうち 65 歳以上の高齢者は 464 人（全体の 59.6%）でそのうち 192 人（41.4%）が専門医群、272 人（58.6%）が一般医群であった。吸入ステロイドは気管支喘息による死亡率、入院率を有意に減少させることが知られているが、一般医群の患者では、専門医群の患者に比べて、喘息による症状が多いにも関わらず、吸入ステロイドの導入率が高齢者・若年者とも有意に低く、十分な治療が受けられていない患者が多く存在していると考えられた。また治療強度と喘息のコントロール状態との関連を検討すると、一般医群では、専門医群に比べて喘息症状が多いにも関わらず、治療強度が低く、この傾向は若年者で顕著であった。また一般医群では、症状の多さに比較して発作止めの短時間作動型 β 刺激薬の使用頻度が少なく、一般医を受診する高齢者は自らの症状を過小評価しているものと思われた。これらの結果より、気管支喘息に対する治療と患者教育が、一般医においては専門医と比較すると、十分には行われていないと考えられた。服薬アドヒアランスでは、高齢者・若年者のいずれも専門医群と一般医群に差は無かったが、高齢者と若年者を比べた場合は高齢者のアドヒアランスが良好であった。これらの研究結果は、喘息死を減らすためには一般医や患者に対する啓発活動、ガイドラインの普及、病診連携の更なる推進が必要であることを明らかにしたものであり、臨床的意義は大きく学位授与に値すると判断した。